

愛知県豊田市の山村地域に電力を供給する「三河の山里」(ミニユニアイパワー)(略称・M.Y.パワー)の社長は、地域の中核医療を担うJA愛知厚生連・足助病院の早川富博名誉院長(50)。同病院の現役の内科医でもある人です。なぜ名誉院長が、電力会社の社長を兼ねるようになったのかー。それには深い理由がありました。

一九九六年に内科部長として足助病院に赴任した早川さんは、先端医療へのアクセスが困難な過疎地の実情に危機感を覚え、以来、地域の中で隣人同士が見守り合い、支え合いながら、病気を予防し、重症化を防ぎ、健康寿命を延ばすための仕組みづくりをライフワークにしています。

医師やケアマネ、ヘルパーらが電子カルテを共有する地域医療連携システムを構築し、自らも健康講座の講師として地域を巡回する

など、農林水産省や厚生労働省の補助金を駆使しながら、さまざまな事業を展開。二〇一六年には名古屋大学や豊田市と共同で「たすけあいプロジェクト」をスタートさせ、ボランティアによる通院支援や、独居高齢者の家にセンサーを取り付けて、日常の暮らしを見守る活動などを試みています。

しかし、補助金頼みの事業には持続可能性がない。経済的自立の道を模索していた早川さんに「電力会社をつくりませんか」と声をかけたのが、名古屋に拠点を置く環境NPO代表の萩原喜之さん(56)。フクシマの惨状を見て萩原さんは「もう原発の電気を使いたくない。電力の選択肢をつくりたい」と考えるようになつたすけあいプロジェクト

2021.5.23

## 社説

# 地域再生可能エネ

### 週のはじめに考える

など、農林水産省や厚生労働省の補助金を駆使しながら、さまざまなか事業を展開。二〇一六年には名古屋大学や豊田市と共同で「たすけあいプロジェクト」をスタートさせ、ボランティアによる通院支援や、独居高齢者の家にセンサーを取り付けて、日常の暮らしを見守る活動などを試みています。小売りといつても基本的には、パソコン上で顧客管理や料金管理が完全自由化されていました。経済産業省に電力小売り事業者の登録を申請し、調達先や資産状況の審査を受けて、認可が下りれば、看板を上げられます。電源の切り替えは、自由化を前提に設立された国営電力広域的運営推進機関が引き受けます。

が三河の山里で交差しました。

地域の中にお金が残り、循環する

ことになるはずです」と、萩原さ

んは考えます。

過疎の山村が抱える課題は医療

だけではありません。一部の集落

で実施した「困り」と

調査」の中からも「森

が荒れる」「耕作放棄を

食い止めたい」「高校を

つぶしてほしくない」

ーと、さまざまなか題題

が浮上していきます。

「集落ごとにミニ発電所を設置

れ先是主に、今は原発で発電をし

ていない中部電力ですが、将来的

に「地産地消」を目指し、再生

可能エネルギーによる電源の開発

を進めています。事業所や民家に

金融機関と組んでつくりたい。電

力の地産地消によるお金の地産地

に回す。そんな仕組みを地元の

の、例えば太陽や風の恵みを利用

して、これまで気付かなかつた地

方への人口分散が加速するとも

いわれています。

過疎は弱点、高齢化は重荷と頭

から決め付けず、今そこにあるも

の、例え太陽や風の恵みを利用

して、これまで気付かなかつた地

域の魅力や潜在力を引き出すチヤ

ンスなのかもしれません。

「M.Y.パワー」。私の力。太陽

や風の力は、地域再生可能エネル

ギー」にもなるようです。

早川さんは期待します。

も計画しています。

も計画しています。